

片芝 詔子 氏の学位審査結果の要旨

主査：村川 知弘

副査：木梨 達雄、蔦 幸治

血小板容積指数の一つである平均血小板容積 (mean platelet volume, MPV) は、血小板活性の指標とされている。より大きな血小板は刺激に対して反応しやすく、容易に化学伝達物質を放出するとされている。この MPV は虚血性心疾患や胃癌や肝癌などの悪性腫瘍の予後因子となることが報告されている。本研究では進行非小細胞肺癌 (NSCLC) 患者における血小板容積指数の生命予後への影響が検討された。

関西医科大学附属滝井病院 (現、関西医科大学総合医療センター) において、2002 年 1 月から 2012 年 12 月までの期間に診察あるいは治療を受けた進行期 NSCLC 患者の診療記録が後ろ向きに検討された。対照群として慢性閉塞性肺疾患あるいは気管支喘息患者より年齢と性別をマッチさせた 134 例が選択された。対照群で設定した MPV/PC (血小板数) 比のカットオフ値 0.40870 で NSCLC 患者群を MPV/PC-low 群と MPV/PC-high 群の 2 群に分けたところ、この 2 群間で年齢、性別、PS、病期、喫煙歴、組織型などの通常の臨床指標では有意差は認めず、血小板容積と血小板数という面において MPV/PC-low NSCLC 群の患者だけが、MPV/PC-high NSCLC 群からも独立した集団であることが示された。単変量解析では MPV/PC-low 群において、有意に全生存 (OS) が短縮していた (生存期間中央値: 10.3 か月 VS 14.5 か月、 $P=0.0245$)。また多変量解析では MPV/PC 比が低値であることが OS の独立した予後不良因子であることが判明した (HR: 1.668, 95%CI: 1.235-2.271, $P=0.0008$)。

本研究は、血算で日常的に測定される MPV/PC 比によって、通常の臨床指標では鑑別できない予後不良群が同定されることを示しており、進行非小細胞肺癌の治療において新たな治験を加えるものであり、学位に値するものと考えられた。